

フォルスターとカント

馬場喜敬

(平成3年9月25日受理)

Forster and Kant

Yoshiyuki BABA

(Received September 25, 1991)

1

フォルスターとカントとは1780年代の後半、「人(人間種[族]) Menschenrasse」について、論争を行った。

経過の概略を記せば、「ベルリン月報」Berlinische Monatsschrift 1785年11月号に、カントが「人種概念の規定」という小論を書いたことに始まる。この論文について、これを補完し、さらに人間(人類)の起源にまで立ち入ったもう一つの論文「人類史の臆測の起源」が同じく「ベルリン月報」1786年7月号に掲載された。「啓蒙時代」を象徴する近代的テーマ豊富なこの月刊誌は、フォルスターの言をかりれば、このとき「ヴィルナというかつてのザルマール人の住んでいた森の奥地(片田舎)に在住していたかれの許にも届けられた。フォルスターはこれらを読み、「純粋理性批判」の著者に対し——ということとは1781年刊のこの難解の書も、当時徐々に哲学読者層に滲透しつつあり、それとともにカントの名声と権威とは上昇、安定してきた——敬意を表する念に欠けるところはないが、かれの経験、——北ヨーロッパ、ケーニヒスベルク中心の世界でなく、J・クックと共にした南海の経験が、これに論評を加えないではいられない気持ちを起こさすのである。題して「さらに少し、人種について、ピースター博士宛に」。これは「トイッテン・メルクール誌」、1786年10月号と11月号に載った。

これに対しカントは1788年1月、2月号に、つづけて「哲学における目的論的原理の使用について」を執筆し、フォルスター説に「批判哲学の先験的原理」を掲げて説得する！ フォルスターはもはや反論をなす気もなく、応答は一行も書かれなかった。

教養部 哲学第一研究室

カントはこの時期、批判哲学の全般的・体系的完成に努力を傾注している——批判哲学の体系的構築という表現には内的矛盾がかくされているのではないか、はしばらくおくとして——87にKrVの改訂2版を出したあと、88, KpVへと移り、KUはその2年後に公刊という集中的仕事ぶりが、世間の耳目を集める。カントには、1804年の死まで20年近い歳月がある。

1754年生まれのフォルスターは、このあと間もなく、1794年僅か40才で世を去る。1789年、フランス革命はカントにもある種の影響を及ぼすが、世界周航者フォルスターの人類愛の感情にはげしく作用する。二人にはMenschenrasseをめぐる論戦の野は時とともに遠いものとなった。

「フォルスターとカント」は、短い論文のやりとりという、エピソード的な小事件(?)にすぎない、というのが一般的な受けとり方である。これは「ポープとカント」ほどにも思想史的な問題性をもたないし、とり上げにくい。そのためかK. Vorländer: Kant (1910)にもひと言の言及もなく(Namenregisterにはこの名も欠けていないが、全体の流れからみてむしろ珍らしく感じられる)、E. Cassierer : Kant (1918, 1921)においても同様である。最近のU. Schutz : Kant (1965)にもない。「フォルスターとカント」をいう位なら「Herder u. Kant」であり、(例えばTh. Litt.ほか)、すでにこの試みは多い。そして「Forster u. Kant」はそれに付随して片付けることができると考えられてきた。

果して「Forster u. Kant」は「Pope u. Kant」ほども意味はなく、「Herder u. Kant」にのみこまれるものであり、また「Kant u. Goethe」、「Kant u. Hegel」或いは「Hamann u. Kant」などに対比してundの濫用である、ということであろうか。しかし果し

してそうであるかどうかは、試論を了えてからでなければわからない。

2

①

1755年(カント31才)、「カントの年表」(Zeittafel)はにぎやかである。

3月に大著 Allgemeine Naturgeschichte u. Theorie des Himmels(「天界の一般自然史と理論」)が出版されている(事情あって匿名で)。次いで6月にはラテン語で「火について」de igneを書いてKönigsberg 大学哲学部よりMagisterの学位をえ、さらに9月、就職資格論文(〔Habilitation〕)「形而上学的認識の第一原理新考」によりK. 大学哲学私講師 Privatdozent für Philosophieとなった。カントはその年から「Philosophie, Naturwissenschaft, Physische Geographie u. Theologie」の領域から、ひろい範囲にわたる主題についての講義をはじめた。

以上のうち、Physische Geographie(自然地理学)は哲学私講師としてのかれの役割の射程外にある。自主講座ということである。のちに——1764年——不安定な私講師の位地を脱する好機として詩学教授の座に推されたにも拘わらず、カントは、自らの使命(天分)を“哲学”においてという理由で固辞しているが、この講座を大学〔私〕講師としての資格をとるや、待ちかまえたように開設したことは、かれの「哲学と自然地理学」とが強い内的な結びつきがあることを示している。

…自然地理学的知識、すなわち地球上の自然の驚異にとんだ事柄、海、陸、大気圏、風土、気候、季節。さらには地球の歴史、また動物・植物、鉱物など、一語でいえば Weltkenntnis(世界知)。これへの関心を持たず、またこれらを知らずして学者 Gelehrte という名を傷つけないですむものではなからう。カントは「1757年SS講義予告」において(Aka. Bd. 2. S. 4)、すなわち開講2年目においてこのように力説する。

この「講義予告」は当時の慣例であったのであろうか。且つ、これにはしばしば小論が付された。上記のそれは「西風」についての小論であった。

「1765/66WS 講義予告」は 1. Metaphysik 2. Logik, 3. Ethik, 4. Physische Geographie を掲げ夫々概略を記している。(繰返えすが、当時の哲学教授の講座名に4は現われなかったであろう)。4はZuhörer

に好評で、カント自身も予想通りの結果に満足してきたという。それに伴い「自然地理学」は内容の拡大を必然的にもとめた。それは「自然的、道徳的、政治的地理学」 eine Physische, moralische, u. politische Geographie とよんでよいものとなっていく。(Aka. Bd 2. S. 312)。人間について、その自然的特性の多様さ、道徳的なものの地域的多様さ(パスカルはすでに人間の道徳は緯度とともに異る、といっている)、に加えて、地球上の諸国家、諸民族の状態、国土(の位置)や人口、産物、産業、商業、習俗などが語られねばならない。

ところで人間については上記3学科も扱っている筈である。

Metaphysik では、この学の名称から自明のように扱われた従来の存在論的伝統からずれて、経験的心理学 empirische Psychologie(合理的心理学 rationale Psychologie でなく)を重視したいという。本来、これは人間に関する形而上学的経験(科)学 die metaphysische Erfahrungswissenschaft vom Menschen である。Logik も人間の思考活動の規則の学である。Ethik、すなわち「一般的実践哲学と徳論」、行われるべきことを示すに先立って行われていることの歴史的哲学的熟考は、人間の研究と不可分である。人間の不変の本性と創造における固有の位置、また古代人には欠けていた見方、人間の発達諸段階に応じた完全性、そこにおける行動の規則などである。

カントが講義するところ、このように、講座名は異っても、たえず、くりかえしそこに人間が出てくる。それに加えてここに Physische Geographie も、これまでの Weltkenntnis 世間知に加えて Menschenkenntnis 人間知の必然性を告げる。Menschenkenntnis は Weltkenntnis と同じ意味で、すなわち世界公民的に(教育を学校段階でのみ考えるのではなく、その先の市民段階を含めて考える)大切なのである。そもそも Weltkenntnis は Menschenkenntnis を包含していたともいえる。しかしあらためて Physische Geographie のなかでもその重要性がうたわれたとなると、もう一つ別の自主講座の開設が意図されてもおかしくない。

新しい自主講座は「人間学——実用的見地での——」 Anthropologie in pragmatischer Hinsicht という名のもとに1772年に始められた。

Physische Geographie とともに、両講座ともカント退官の年まで続けられることになる。(前者S—

夏学期—,後者WS—冬学期—)。「実用的見地」と制約を入れて、これが必ずしも全体的包括的な意味の人間学でないことが明らかにされる。カントが後年、定式化した「四つの問いの、第4、人間とは何か? Was ist der Mensch?」についての応答のすべてをこの書がに持っているわけではないのである。むしろ、Physische Geographie との対応を意識して、序言には以下の文もみえる。

「人間学の範囲を拡張する手段としては、専ら旅行をすること、od 旅行記を読むことである。……が人間知をより広い範囲に拡張するために、何を外に向かって求むべきかを知りたいなら、先ずもって自分の町や国の仲間との交際を通して人間知をえておくがよい……。このようなプラン(すでにこれも人間知を前提しているが)なくしては、世界公民は人間学に関して限られた範囲にとどまることになる。またその際、哲学によって秩序付けられた一般的知識が局所的知識に先行しなければならない。そうでないと認識はすべて断片的、暗中模索的となり学問の役をなさない。

さて、1775年SS講義公告〔の付論〕として「さまざまな人種について」が刊行された。ところでこれは「自然地理学」の講義公告としてであって、上述の如く1772年から始められていた「人間学」のではない。

これは何を意味するか。自然地理学講義公告これまで何回か行なわれてきた。単にその踏襲であったかそれとも Menschenrasse は人間学よりもともと自然地理学の次元のものか。人間学は Menschenrasse をとり扱わないのか、だとすればそれはいかなる理由からか。

両講座とも一巻本となった著作において夫々 Menschenrasse 論、od. 少なくともそれに関説するような頁をもつ。

Physische Geographia (Akad. Bd IX. 151–436)

Erster Band: Vorrede des Herausgebers/ Einleitung/ Mathematische Vorbegriffe

Erster Teil: Vom Wasser/ Vom Lande/ Atomspäre/ Geschichte der großen Veränderungen, welche die Erde ehedeh^{er} erlitten hat und noch leidet/ von der Schifffahrt.

Zweiter Band:

Zweiter Teil: Besondere Beobachtung, dessen, was der Erdboden in sich fa^ht

Erster Abschnitt: Vom Menschen

Zweiter Abschnitt: Das Tierreich

Dritter Abschnitt: Das Pflanzenreich

Vierter Abschnitt: Das Mineralreich

Dritter Theil: Summarische Betrachtung der vornehmsten Naturmerkwürdigkeiten aller Länder nach geographischer Ordnung

Der erste Welttheil: Asien

Der zweite Welttheil: Afrika

Der dritte Welttheil: Europa

Der vierte Welttheil: Amerika

• *Vom Menschen* (S. 312–S. 320)

- (1) *Der Unterschied der Bildung u. Farbe der Menschen in den verschiedenen Erdstrichen*
- (2) *Einige Merkwürdigkeiten von der schwarzen Farbe der Menschen*
- (3) *Meinungen von der Ursache dieser Farbe*
- (4) *Der Mensch seinen übrigen angeborenen Eigenschaften nach auf dem ganzen Erdboden erwogen*
- (5) *Von der Veränderung, die die Menschen in ihrer Gestalt selbst veranlassen*
- (6) *Vergleichung der verschiedenen Nahrung der Menschen*
- (7) *Abweichung der Menschen von einander in Ansehung ihres Geschmacks*

Anthropologie in pragmatischer Hinsicht

(Akad. VII S. 117–333)

Erster Theil: Anthropologische Didaktik

Erster Buch: Vom Erkenntnißvermögen

Zweites Buch: Das Gefühl der Lust und Unlust

Drittes Buch: Vom Begehrungsvermögen

Zweiter Theil: Anthropologische Charakteristik

A, Der Charakter der Person

B, Der Charakter des Geschlechts

C, Der Charakter des Volks

D, *Der Charakter der Rasse*

E, Der Charakter der Gattung

Grundzuge der Schilderung des Charakters der Menschengattung

• *D, Der Charakter der Rasse* (S. 320–321)

以上、前者において9頁、後者では2頁があてられているが、何れも「付論」「さまざまな人種について」に対応するほどの内容をもっていない。

2)

1755年、Georg Forster (1754-1794) はこの年まだ2才、生地ナッセンフーベン (Danzig 近郊の村) に育つ。父、J. Reinhold Forster (1726-1798) は29才、言語学、地理学、自然科学、さらには神学にわたる広い領域の考究に余念がなかった。そこへ、1765年、(Georg 11才、Reinhold 39才) ロシアのカタリーナ二世から要請を受け、ヴォルガ地方のドイツ人地区の調査をすることになる。父は息子を伴い赴任した。3月、ペテルスブルク、モスクワ、ペトログスク、サラトフなどを巡歴し、その旅程4,000 kmをこえる。中央アジアの草原や湖をも知った。父と子は夫々の眼で自然と人間を観察し、心に留めた。Georgはこの巡歴の間に7ヶ月ほどドイツ人学校に通い、これがかれの唯一の公的機関での教育となったが、かれは感受性の強い少青年時代、はるかに多くを「世界という大きな学校」で学び「自然という素晴らしい書物」を読む機会をえたのである。Reinholdは職務上の報告書を宮廷に送った。それにはサラトフの見聞、すなわちその地の長官の搾取・抑圧のさまが記載されていた。宮廷はそれを改善の資料とみずに、激怒の対象とした。給与は停止され、Reinholdは1766年8月イギリスにわたることになる。

ここでReinholdは教職をえて博物学を教える。この期間に1777年英語で公開された著作(Observation on physical geography, natural history and ethic philosophy) (独訳Berlin 1783)の基礎ができたであろう。

ときにイギリス政府はJames Cookを後援して世界周航の成果の拡大を目ざしていたが、1768年~1771年につぐ第二次周航にReinholdとGeorgの乗船を求めた。

出航は1772年7月13日、ポーツマス港より。年が明けて南極圏に達し、北上してニュージーランド、タヒチなど南海諸島の間をめぐる。再び年明けて1774年、南極へ71°10'まで。そしてイースター島、マルケサス、ライアテア、トンガ、ニューカレドニアなど、再度広域にわたり南海諸島群の探査がつづけられた。1775年1月3日、ニューイヤール諸島を発ち、セントヘレナ、アセンシオン、赤道をこえ、7月30日スピザードに帰港。

この三年余にわたる多くの地域、島々の自然、その形

状や気象、風、動物相、植物相、また民族、習俗などの見聞、経験は、さめやらぬ青年の情熱の中で、すべて書物に再現された。1770, London, A. Voyage Round the World. 2 vols (独訳Bd I, 1778, Bd II 1780. Berlin, Johann Reinhold Forsters u. Georg Forsters Reise um die Welt in den Jahren 1772-1775) 最初英語で、ついでドイツ語版で公開されたフォルスター「世界周航記」は大きな反響をよんだ。ヴィーラントの書評(“Teutscher Merkur”)は「この時代のもっとも驚嘆に値する書物の一つ」と書く。(Georg Forsters “Reise um die Welt, Nachwort von Gerhard Steiner S. 1015, Insel (1983)”。Goetheもこれをよんだ。多くの読者がこの長い航海と南海諸島の自然のよどみない記述や挿画に魅了され、ドイツ宮廷のいくつかは庭園にその面影をとり入れようとさえ試みた。ベルリン西郊のヴァーンゼー湖にある孔雀島につくられた離宮に、タヒチ島の藁葺きの家が残っている。ブーガンビルの「世界周航記」はバりに波紋をおこしたが、フォルスターのドイツ語本はさらに北にその影響を及ぼした。

カントはこれを読んだであろうか。

3)

「自然地理学」開講時、カントがあげている文献には次のものがある。先ずVarenius, Buffon, Lulofなどの著作。旅行記として、一般的全旅行誌 Allgemeine Historie aller Reisen zu Wasser u. zu Lande (1747-74) 21 Bde, ゲッティンゲンの新旅行記集 Sammlung neuer u. merkwürdiger Reisen zu Wasser. zu Lande, Göttingen 1750-57, ハンブルグ誌 Das Hamburgische Magazin od. Gesammelte Schriften aus der Natur, Vorsehung u. gesammter Wissenschaften Hamburg 1748-63 26 Bde, ライプチヒ誌 Allgemeines Magazin der Natur, Kunst u. Wissenschaften, Leipzig 1753-61. 12 Bde. ついで、パリ及びストックホルムの学士院記事、その他、である。(1757年SS講義公告)。

以後も、つねに幅広く、旅行記はもとより、他のあらゆる分野の書でも役立つようなものには、カント独自の嗅覚をはたらかせていたにちがいない。リンク編纂の「自然地理学」末尾の引用書名索引は、上記を含めて100点以上の文献をあげ、Adickesによれば、20数点をさらにこれに加えることができるという。自然地理学の内容拡大とともに、カントの採用基準も補正されれば、その数はさ

らに多くなりうるであろう。

1778年以降、カントは学生や一般聴講者たちにこういうようになるであろうか。「旅行記を読みなさい。新刊ではゲオルク・フォルスターの“世界周航記”が面白い」と。もちろんこれには確証がない。むしろそうでなかったようにおもわれる（後述）。しかし、ひもどけば、中頃に以下の如き Tahiti の章もあらわれる。

3

Tahiti タヒチ

1773年8月。

朝、われわれがオー・タヒチ島を2マイル先に見た時のことを、どんな詩人でも筆にしがたいことであろう。これまでともにしてきた東風も止んだ。陸地からの微風がさわやかで、新鮮な香気を送りこみ、海面に小波を立てた。森をいただいた山々が誇り高く、壮麗な姿をさし出し、朝の曙光に輝いた。その下は低い、静かに傾く丘となり、同じく森をいただき、各種の優雅な緑と秋の褐色を展開した。それからは平野となり、実を結んだパンの木や無数のしゅろが影を落していた。しゅろの堂々とした梢はパンの樹の上にびている。まだすべてが深い眠りについているようで、朝はまだ明けず、静かな影がお風景にただよっていた。次第に樹の下の家やカヌーが明確にみえてきて、半マイルほどの岸辺にそって低い崖が走っていく。その岸に海が泡立ちつつ寄せて砕けた。その先の海は、しかし鏡のようで、最も安全な投錨地だとわかるのである。今や太陽が平地を照らし、住民はめざま、風景が生き生きとよみがえってくる。

—Georg Forster: *Entdeckungsreise nach Tahiti and in die Südsee 1772–1775*, [Alte Abenteuerliche Reiseberichte] Edition Erdmann (1988), S. 111.

—Georg Forster: *Reise um die Welt*, Insel Verlag (1967) S. 241

いかに美文とはいえ、文章はその場の、神経をゆるめ、一瞬陶酔的な気分させるあのトロピカル特有のぬくもりを与えてはくれない。しかしこのイメージをかき立てる克明にして鮮やかな描写は、ブーゲンビル以来のタヒチ・ブームを再熱させ、アトランチス・ユートピアに代るタヒチ・ユートピア幻想を育むに大いなる力を

かしたであろうことは充分理解しうるのである。しかしヨーロッパでの「幻想」をよそに、フォルスターは冷静な観察と記述をつづける。

住民たちは昼の時間は休むので、一人一人茂みに消えていった。われわれと一緒に進んだ者は僅かだった。南東へ2マイル進んでから、かなり入りこんだ小さな入江をなしている海辺に来た。まわりは到るところ植物園で、素晴らしい草地の真中にマライ Marai. すなわち墓地に出くわした。これは三列の石からできていた。どの段も3.5フィートほどの高さで、どれも草、しだ、灌木でおおわれていた。マライから内陸側へ、しっかり並べられた石の壁が続き、その高さは3フィートばかりあった。その壁の内部の建物に沿って、2〜3本の淋しい椰子や、いろいろな若いカスワリ Casuarinen の樹が生え、悲しげに枝を垂れ、情景に荘重でメランコリックな趣きをそえた。藪でとり囲まれていたマライからそう遠くないところに、このマライの下方に小さいトウバウ Taupapau (死人) がいる。そこに長いひだをつけて両側にさがった白い布に覆われた死体があった。若い椰子の樹とバナナが地から勢いよく生え出て、リュウケツ樹 Drachenbaum が花を咲かせていた。そばにもう一つ小屋があり、神 (エアトウア) Eatua のための食糧が貯えられていた。そのそばにマットでくるんだ鳥がかけられている杭が立っていた。この小高いところの小屋に、悲しげな、もの思いにふける女が坐っているのをみた。近付くと立ち上り、合図で近づかないようにというのである。われわれは遠方から少しの贈物を差し出したが、彼女はそれを受けとろうとはしなかった。われわれがインディアン (ニューゼaland人のごと。当時ヨーロッパ人は黒人をニューゼaland人またはインディアンとよんだ) からきいたところでは、死体は女で、この女は喪に服しており、マライのものだ、という。… いたるところ宗教の考察によいきっかけを与えてくれるこの情景には偉大なものがひそんでいた。(S. 130ff/S. 273ff.)

まことに厳粛な光景であって、静止画像のように、ここに保存されつづけるであろう。筆者もまた1990年11月の自分のマライの臨在をこれと合一させ、考察をはずませたい思いにかられる。ところで道のりをもとに戻すと、すぐにまた別の光景に出くわす。

……ここから道は岸辺に沿って、前のによく似た別のマライを通してつづいていた。このマライの向う側にきれいな家があって、大へん太った男が体をのぼし、横になってねそべっていた。二人の召使が、かれのためにパンの実とバナナをかなり大きな器のなかでこまかくついて、水を注ぎ、それに醗酵したマハイといわれる練り粉をまぜてこね、液汁（飲みもの）にしていた。かれの傍らの女は大きな焼きぎかなとパンの実を毎回かれの口につめた。かれはそれを非常な食欲のみこんだ。この男は腹ごしらえの他の心配はなく、鈍感な不感症のうつし絵であった。流し目に挨拶してかみ砕きながら、ほんの一言、二言いったのち、召使に命令して、われわれにみとれて食べものこと忘れるなといった。島の散歩で、とくに今日感じた大きな満足は、この貴族をみて少なからず傷ついた。国民全体が文明の一定段階に達し、質素な平等をお互いに獲得し、あらゆる階級が多少の差はあっても、同じ食糧、同じ満足、同じ労働と休息を享受している地上の片隅の場を発見したのではないか、とのこころよい期待を胸に秘めていた。それがこの怠け者の欲求をみて妄想だとわかったのである。（S. 131 / S. 275～6）

無為飽食「人間社会に何らの寄与もしない怠惰な怪物」に激怒したあとに、別のところでは以下のような議論も交わされたのである。

この家で休息していると、王の最高の顧問らしい太った男の エー・ティE・Tie (Eti) が、たずねた。

「神 (エアトウア) Eatua はあなたの国に存在するか、かれ (神) を祈るか (エプーレ) Epuhre? 」

(Forster) 「われわれに一神ein Gott あり。かれがすべての創造者で、しかも不可視なものだ。かれにわれわれの願いを捧げる」

「この点で双方は一致している」

(Forster) このように単純な唯一の神の概念は、あらゆる時代と国に知られており、多神教の複雑な悪魔的思想の防塞となることができる筈なのだ。

フォルスターはこの章のこの節を、ヴェルギリウスの詩句をもって閉じている。私もこの引用をおえるに同じ句をもってしたい。

女王よ、心ならずもあなたの国の岸から、わたしは離

れました。——「アエネーイス」第6歌, 460

4

カントの75論文「さまざまな人種」にTahitiも一ヶ所出てくる。

多分、ブーゲンビルの先の大冊, Reinhold Forster の小文などが出典と思われるが、カント注釈者によればクックの最初の旅行記 (1772 独訳 1774) によっているという説が有力である。

「……このことはヴェニスの古い貴族、とくにその女性の上に認められた、といわれる。少くとも新たに発見されたタヒチ島においては、貴族の婦人はみな普通の婦人より身長が大きい。」

「このこと」というのは家系血種 Familienschlag のことであるが、この家系血種がどういうものかはさらにさかのぼって多様変種 Varietäten のとらえ方を知らねばならないし、それを知るにはさらにさかのぼっていきつくところカントの立論の出発点、つまりはこの論文が何故書かれ、何を目的としているかに立ちいたらねばならないが、この点について小稿ではあるがすでに「Physiographie und Physiogonie bei Kant—Geschichtsphilosophie als Naturgeschichte」(本学紀要 18集 1978) があるのでくりかえさない。

ともかく「タヒチの貴族の婦人」について、それが普通の女性より、こんなにちのちない方をすれば、何らか優生遺伝学的原因で、大きい(身長がある)といおうとしているその資料は大へん貧弱というべきである。これが正しいかどうか、また報告者の意図にそうものであったのかどうか。

資料の少なさ、それはカントの責任ではなく、時代の制約である。したがって、こんなに、民族の数は400～500、それらについて自然地理学のみならず、文化人類学的、民族学的、比較宗教学的などなどの豊富な知識の蓄積がなされている状況との比較論は問題外である。しかし資料の少なさをカバーするための、od 少なさに対する無反省的な理論的欲求の先行はどうであろうか。

カントは以下の如く述べる。

「一見して見分けが付き、且つ恒久化される一切の区別を導き出しうるためには人類の4種族 vier Rassen を仮定しさえすればよい」

「われわれは4つの人種 vier menschliche Rasse

を数えてきた。それによって人類の一切の多様性が理解される。しかしすべての変種はともかくも一つの主幹種族 Stammgattung を必要とする」

「種族の生ずる最大原因は“空気と太陽……”。

一見、簡明単純のようで、タウトロギー的な理論的枠組の中で、さまざまな概念が繁茂する！ その真理性は、カントの旺盛な知的好奇心（ヤスパース的といえバ ursprüngliches Wissenwollen）と、それと同じ位強い理論化欲求そのものに基づいているのであるかのようである。od. それにすぎないかのようである。従ってそこに問題がある。

1775年、カントは批判哲学への途上にある。1781年 Krvciにおいてカントは判断を、総合判断 synthetischer Urteil と分析判断 analytischer Urteil に分けるという着想によっての形而上学の難問に光を投ずることができるという確信に達する。1775年論文は、同じ方向での着想がカントを鼓舞した結果ともいえる。

われわれは自然記述 Naturbeschreibung と自然史 Naturgeschichte という名称を概して同一の意味にとる。しかし、今あるがままの自然物 Naturdinge の知識は、さらになお、それらが以前にあったところのものについて、またそれらが夫々の場所において、それらの現在の状態に到達しようとしていかなる系列の変化をたどってきたかについての認識を求めさせることは明らかである。……まだほとんどわれわれに欠けている自然史は、地球形態の変化、及び地球上の被造物（植物と動物）が自然的な移動によってうけてきた変化、またそれから生じたそれらの主幹類 Stammgattung の原型 Urbild からの変種 Abartung をわれわれに教えてくれる。……自然史はおそらく多数の見かけは異なっている種 Art を、まさに同じ類 Gattung の種族 Rasse へ還元して、自然記述の、今は非常に冗長な学校体系 Schulsystem を悟性に対する自然体系 physisches System に変化してしまうであろう。

— Akad II S. 434/Suhr XI S. 18

以上は注の形で挿入されているが、85年論文、88年論文においても、夫々、場所をえて、同じく注の形で、表現をかえて挿入されているのである。

85年論文

……種 Art と類 Gattung は自然史（自然における生産と系統のみが問題であるところの歴史）においてはそれ自体として区別されない。自然記述においては、ここでは特徴の比較のみが問題であるから、種と類との区別のみが生ずる。ここで種 Art と称されるものはかしてではしばしば種族 Rasse とのみ名づけられざるをえない。

88年論文

私としては、自然記述に対しては Physiographie という語、そして自然史に対しては Physiogonie という語を提案したい。

そもそも Naturgeschichte のなかに Naturbeschreibung が含まれ、これを Naturbeschreibung と同一視して（邦語を使えば自然史でなく自然誌として）使ってきた。

両者を分けるべきという考え方が生まれ、Naturbeschreibung 自然誌、Naturgeschichte 自然史が確立する。これをカントは用語をかえて明確にしようとし出した。——人種論をはなれていえば、この考え方は現代も通用するであろう。人種論での混乱すなわち <Kant contra Kant > は何に基因するのか。

5

Tahiti から帰ったフォルスターはカントの75年論文を読んだであろうか。かれは「世界周航記」の執筆にかり切りであったともおもわれる。1784年、フォルスターはポーランドのヴィルナ大学の教授となり、87年7月までその職にある。この時期、かれはカントの前述2論文すなわち（85、86論文）を読むことになる。そして冒頭に記したように、Tahiti の体験、南海諸島の見聞がかれに筆をとらせる。“Noch etwas über die Menschenrasse”

フォルスターを驚かせたことは幾多もあった。

a) カント氏という。求めるべきものが何か、あらかじめ分っている場合にのみ必要なものを経験の内に見出すと。——一体、これが批判哲学なのか！

「この命題がたとえ異論をはさまぬ正当さを持っているにしても、この命題を適用する際には、もっとも愚かしい幻想を回避するために、やはり一定の慎重さが必要としよう。この幻想とは、必要なものを一定の仕方ですら求めようとする際、それが実際には存在しないところでもなお求めようと信じ込むことにはかならない。私は欠陥のある原理に従って、諸対象に自分の眼鏡の色を押しつけるような考察者よりも、無心な観察者の

方に、ずっと多くの信頼をおき、助言を求める。

〔多くの〕旅行者の名で呼ばれる人たち……しかし人種 Menschenrasse という語に関しては、かれらの概念が互いに一致しあうことはほとんどない。だがこれほど異なる概念や知識をもつ人たちも、かれらの観察を叙述する際には、互いに一致しているが故に、この多くの旅行者が様に口にしてしている事象については、おそらく真実であるということができよう。」

b) 「カータレット、ブーゲンビル、ダンピアとクックなどの現地報告をよそに、カント氏は「南洋の住民の固有の色」の明確な概念はえられないとか、(また逆に) 大半の南洋諸島の住民が白人であるにちがいない」と推論する。前者については、雑多ながらかなりの資料があり、後者にも断定を拒む多くの資料があるのであるが……。」

フォルスターの困惑が伝わってくる。かれは辛抱強くカントの述べた全項目について見解を開陳している。——ホットントットをめぐってニグロ(人間)と猿(類人猿)との関係の問題は当時の流行テーマであったが、フォルスターの意見は明快である。

…2種の動物種族 die beiden Tiergeschlechter (genera) である人間と猿は地上の生物の系列中、その他の動物種との類縁関係に比べて、信じられぬほど近うたがいに境を接しあっているとはいえ、これらの両自然種族の間にはやはり、明白な間隙ないし隔たりが認められる。人間はニグロで終り、同様に猿はオランウータンで始まる。したがってどんなに猿に似た人間も決して猿ではないのである。

6

カントは反論した。88年論文がそれである。その前にカントの「人間学」を振りかえろう。

そもそも人類 Menschengattung は(これを他の惑星における存在者とくらべ^びと^りの造物主 ein Demiurgus によって生じた被造物の集まりとして、理性的な地上存在者 vernünftiges Erdwesen という種 Species だと考えれば、〔これを〕種族 Rasse と呼ぶこともできる) ——そこで問うならば、人類は善い種族とみなされるべきか、或いは悪い種族とみなされるべきか、私はこの問いにほこりをもって答えることができない。…

——人類の性格, 第109節 Akad. VII S. 331

また次の節の書き出しには「どこか他の惑星には考えた通りを口に出さないではいられない理性的存在者…がいるとしたら、人類とはどんなにちがった行動(振舞い)をするだろうか」、という趣旨の文がある。

これらはいったいいかなる日付けをもった文章であろうか、すなわち教室 Hörsaal でいつ講義されたか、ということでもある。

われわれは1755年, Himmelsgeschichte (かの著作の略称) において、カントが理性的存在者を他の惑星の上に住ませたことを想起しよう。いまここで、再び、他の惑星における存在者と比べて、地上の理性的存在者すなわち種族 Rasse だとして人間が表象されている。

これは「自然地理学」の人間とちがった影を宿していないだろうか。カントの心の底に、執拗に55年以來の人間の像が住みついている。——〈Kant contra Kant〉

88年論文は Menschenrasse 論とカント哲学の祖述者 K. L. ラインホルトの激励をかねている。題も「哲学における目的論的原理の使用について」

カントの反論の一例。——

同一の基幹に属することは: 直ちに唯一の根源的な対 Paar から生み出されたことを意味しない。——フォルスター氏は、私とその唯一の対を事実として、しかも或る権威(聖書)に従って主張しようとしている、と私を疑っているが、しかしそれは理論から全く自然的に生じてくる理念にすぎないのである。…猛獣がいたがために、唯一の対から始まった人類が安全であることは難しかったであろうという難点については、これはその対にとって特別の苦勞とはなりえていない。けだしその一對を創ったすべてを生み出す大地は、猛獣を人間より後に創り出しさえすればよかったかも知れないからである。」

これに対し、フォルスターには、再反論はわずらわしいこととしか思われぬ、代って彼は H. ハイネにあてて書いた(1787, 1.21付)、「メルクール」誌の私の論文があなたの気に入っていただけたことは、私にとって大きな喜びです。カント氏がわれわれを堂々回りさせ、かれがすでに前提において与えてあった概念を発見するよう申し立てていたことを差し引きするならば、私は諸事象を時々別の側面から見るのはよいことだとおもいます」

出色の「カント伝」を書いたアルセニイ・グリガ(1977,

独訳1981)。かれが「カントとフォルスター」に言及するのは88年論文の時点である。それもく第5章、真・善・美)の中で軽くひとなでする程度に。

……フォルスターに対する返答の中で、カントは自分の考えをより正確に表現した。「それに従って探究すべき指導原理を欠いた単なる経験的模索によっては、なんら合目的なものはいだされないのであろう」と、フォルスターに反対する論文の中で、カントは自然と芸術とを比較検討した。自然と芸術においては、人は生ける有機的全体を見なければならぬ。…すなわち合目的性の原理に基づいてみること。……

グリガは、上述の如き人間の見方における〈Kant contra Kant〉を捨象する。そうすることはかれにとってはglücklichなことであらう!

×

88年論文は(85年論文も)批判期80年代の著作ということもあって、一括して「カント著作集」中「歴史哲学」Geschichtsphilosophie od. geschichtsphilosophische Schriften の名のもとに収められる。88年論文及び85、75論文に關説する本稿も、「カントの歴史哲学」研究に加わりうるであらうか。打ち明けていえば、これを以て「歴史哲学」のAnlitzに、歓迎の微笑がこぼれることを期待する。それはフォルスターの復権に通ずるものであろう。

註

1) Menschenrasse.

G. Herder, Ideen zur Philosophied. Geschichte der Menschheit, 1784

I, Kant: [Von der verschiedenen Rassen der Menschen, 1775]

“ : Bestimmung des Begriffs einer Menschenrasse, 1785

“ : Mutmaßlicher Anfang der Menschengeschichte, 1786

G. Forster; Noch etwas über die Menschenrassen. — An Herrn Dr. Biester, [Wilna, den 20 Jul. 1786]

ForsterとKantはこのようにMenschenrasseという語。od. 概念をめぐる論を交わした。KantがMenschenrasseの語をタイトルに使ったのはHerderの「人類

の歴史の哲学考」の批評でもあった1785論文においてである。1775論文ではRasse(Race)der Menschenであり、1788論文ではタイトルからは消えている。

ForsterはKantの1785論文をうけてMenschenrasseを用いている。上表でHerderはMenschheit(Geschichte der Menschheit), Kantはそれに対応する語としてはMenschengeschichteを使っている。Menschheit, Menschengeschichteは他の著者、他の著作にも用例は多いが、Menschenrasseは、その意味の曖昧さもあってか、用例に乏しい。というよりこの2論文に集約されている感じである。因みに; Geb. Grimm; Deutsches Wörterbuchでは以下の如し。

Menschenrasse—Grimm Bd.12, S.2064

f. natürliche art der menschen, nach kennzeichen der hauptabstammung, menschenschlag in diesem sinne; gingen wir wie bär und affe, auf allen vieren, so lasset uns nicht zweifeln, dasz / auch die menschenracen (wenn wir das unedle wort erlaubt ist) ihr einschränktes vaterland haben und nie verlassen würden. HERDER z. phil. 4, 18: vom schönsten Griechen bis zum neger ist alles menschenrace. LICHTENBERG 1, 107; die idee von der veredelung der menschenrace. IMMERMANN. München. 3, 175.

これによってもこの語が使われる知的圏域がうかび上がり、上記の見方の補強に役立つといえよう。

ついで問題は邦訳の「人種論」である。これが適訳であるかどうかは一考を要するが、ここでは慣例に従う。

慣例といっても、これは多分、カント研究者という小集団内で生まれ、使われたことのたまたの踏襲であらう。

もしこれがヤスパース研究者の間で使われるとしたら、この語(「人種論」)はMenschenrasseをよびおこすことなく、Rassentheorieであらう。すなわち、戦後日本でいち早く読まれるようになったヤスパースの“Die geistige Situation der Zeit, 1931”(「現代の精神的状況」)のなかで取り扱われている理論(思想)の一つ精神分析Psychoanalyse、マルクス主義Marxismusとともに「実存の充実可能性に脅威を与える」三つの、擬似科学的、政治的、イデオロギー的、反人間的な思想のうちの一つ、ナチズムの別名でもあるところのもっとも忌むべき語であるRassentheorieである。

MenschenrasseとRassentheorieとに類縁関係を見定

めることはむずかしい。

2) James Cook (通称 Captain Cook)(1728-1779)

3度にわたり世界周航をなす。Kolumbus(Colon) 1446-1506, Magellan(Magaglianes)1480-1521, につぐ第三の大航海者といわれるが、前二者がいわゆる「大航海時代」の初期(「大航海時代」が15~16世紀に限定されるならばまさに「大航海時代」そのもの)を代表するに對し、一世紀を経た後期(od. 成熟期)を代表する。前者はポルトガル、スペイン主導期であり、後者はかの“1588年”(スペインを継いだオランダ無敵艦隊がイギリス海軍に敗退の年)後の、イギリス国家が推進した事業の遂行者である。これはさらに一世紀後の、天下周知の、Ch. Darwin(1809-1882)のをせたビーグル号世界周航へとつながる。なお、フランスではL. A de Bougainville(1729-1811)が、Cookとほぼ同時代人である。ドイツがA. Krämmer, Samoa-Inseln Bd. I, IIの形で人目につくのは20世紀初頭である。

Cookの3度の世界周航の概略は次の通り。

第一次世界周航(1768-1771)

Tahitiでの金星通過観測が一つの目的。Tahitiはすでに上記Bougainvilleが1767年に発見しており(書物 Voyage autour du mondeとしての発表は1771年)。ここではフランスのあとを追った形となる。新規にはニュージーランドが二つの大きな島からなることを確認、さらにオーストラリア〔大陸〕の東海岸をはじめて探検。

第2次世界周航(1772,7,13-1775,7,30)

〔この航海にForster父子、ReinholdとGeorgが参加〕Tahiti上陸。南極海域に2度、横断を果たす。南海に存在すると信じられてきた幻の大陸の非存在を確認。

第3次世界周航(1776-1779)

1778。ハワイ諸島を発見。そこからアラスカ、ベーリング海を探検。ハワイに戻ったところで住民に殺害される。未だ51才であった。

Cookの人物像についてはGeorg Forsterが活写している。“Cook, der Entdecker—Schriften über James Cook, von Georg Forster u. G. C. Lichtenberg/Röderberg—Verlag, Frankfurt am Main, 1976”以下の3篇を含む。

G. Forster; Cook der Entdecker, 1789

” ; Fragmente über Kaptän Cooks

letzte Reise und sein Ende, 1780/81

G. C. Lichtenberg; Einige Lebensumstände von Captain James Cook, 1780

3) Carl von Linné (1707-1778) u. G. L. Comte de Buffon (1707-1788)

カントはしばしば自己の所論がLinne, Buffonに依拠しているという。両者の主著についてふれる。

a) Caroli Linnaei: Systema naturae, / Per Regna Tria Naturae/ Secundum classes, ordines, genera, species, / Cum / Characteribus, Differenciis, Synonymis, Locis / Editio Decima, Reformata, 1758.

カルル・リネウス著 自然の体系。自然の三界を/ 綱・目・属・種に分け/ 特徴, 相違, 同物異名, 産地を付す。/ 改訂第10版。1758年。

周知のように今日の動植物分類の基礎を提供した「自然の体系」の初版は1735年の刊行であるが、これは「未完の二つ折版12頁、私リネがJ. F. Gronoviusにより出版。これは仕事の見通しにすぎないもので、あたかも地図の如きもの」(第10版序文)というように、発端的私案であった。この10版にいたって8つ折版の大増補版となった(これが国際動物命名規約 International code of zoological nomenclatureの出発点)。カントもこれを利用したであろう。その分類段階は。—

綱 Classis 目 Ordo 属 Genus 種 Species 変種

Varietas

最高の類	中間の類	至近の類	種(形相)	個体
属州	属領	駐屯地	村落	家宅
軍団	連隊	中隊	分隊	兵士

今日の門 Phylum (E, Haeckel, 1866に始まる), 科 Familia (Batsch, 1780に始まる) はリネにはない。この3段, 4段には、今日われわれが「命名基準のテキスト」として活用している文献には似つかわしくない語が並んでいる。これは自然の帝国 Imperium Naturae od. 王国 Regnum とか、共和国 Res Publica というイメージで自然をみたリネ的思想から生まれた、かれの根本見解は「大地の創造の目的はヒト Homo (理性的なヒト Homo rationalis) による自然の作品からの神の栄光の讃美である。」

カントがリネの思想を全面的にとり上げたことはな

い。カントはMenschenrasse od. Rasse 論にリンネを援用できているが、そしてRasseをvarietasの意味に使っているが、リンネのvarietasは個体であって種族ではない。— ㉑

b) G. L. L. Comte de Buffon; Histoire naturelle generae et particuliere, 1749-89, 36 vols.

…自然に基づく種の定義を見つけ、それにより自然に基づく分類体系に到達しようとする企ての基礎には形而上学の誤りがある。その誤りとは「常に漸次移行によって生ずる自然の過程を理解しないこと」である。最も完全な被造物より最も不定形の物質へとほとんど知覚できない段階によって下降することが可能である。この知覚できない微妙な変化が自然の偉大な働きである。この変化は、あらゆる種の大きさや形についてだけでなく、運動、発生、継承にも見られる。…故に自然は未知の段階に従って進行するから、このような分類(属と種)に全部は従えない。…多くの中間の種と、半ば一つの綱に半ば別の綱に属しているような沢山の物があるであろう。この種のものには、地位を振り当てることのできないために普遍的な体系をめざす努力を必然的に空しいものとする。…種の概念は人為的で生物学者にとって有害な概念なのだ。…「概して自然の造るものに関しては、分類区分を多くすればするほど真実に近づく。なぜならば実際には、自然の中では個物のみが存在するのであるから」(「博物誌」vol 1, 1749) — ㉒

ところが36巻の「博物誌」は40年の長きにわたって誌されたのである。見解の変化も当然起りうる。きっかけは「雑種の不毛性」であった。このことは「種が客観的に基本的な実在である」という観念を抱かしめる。「個物は、どの種に属するにせよ、宇宙では無である。これに反し、種は自然そのものと同様に古く永続的であり、自然の唯一の存在である。「種は、数と時間より独立した統一体、常に生き、常に同じ統一体、被造物の中の一つと数えられ、それゆえに創造の一つの単位を構成する統一体である」(「博物誌」vol. 8 P 1.) — ㉓

c) 以下はカントが3論文を通じ、自然史(博物学)に関して明らかにした概念対応表である。

I	II
Physiographie	Physiognie
Naturbeschreibung	Naturgeschichte

Schulgattung	Naturgattung
(species artificiaeis)	(species naturaeis)
Nominalgattung	Realgattung
Nominalverwandtschaft	Reale Verwandtschaft
haft	
classes, ordines	genera, species
(logische Absonderung)	(physische Absonderung)
Schulsystem	Natursystem
Schuleinteilung	Natureinteilung

カントはかれのいうPhysiognie=Naturgeschichteの立場から㉑をSchulsystemに入れる。そして一見㉒の立場をとるが、時として㉓を、自己矛盾を感じることなく(od. あたかもこの区分によって感じないですむことができるかのように als ob) うけ入れる。ここにForsterのいう「カント氏の堂々めぐり」があるといつてよい。

「一切の迷妄は判断の主観的根拠が客観的とみなされるところに生ずる」Alles Schein besteht darin, daß der subjektive Grund des Urteiles für objektiv gehalten wird」と書いたのはカント自身である。(Prolegomena, § 40)

これと Menschenrasse の問題に関し、「観察だけにとらわれていると、結局のところ抽象能力をそこなってしまう」のであって「求めるべきものが何か、あらかじめわかっている場合にのみ、必要なものを経験の内に見出す」としたのは、或る種の変身(!)であろうか。のちにVaihinger(1852-1933)はこうしたやりとりをFiktionの哲学の立場から総括的にみることになる。

「分類学上の概念はみな虚構である。しかし現実性が皆無とはいえないので、Eigentliche Fiktion に対し Halb-Fiktion とよぶ。」(Die Philosoph des Als Ob, 1911).

Vaihinger ならずとも、上記論争の評価、判断は従来の「解説」の次元をこえなくてはならない。